國學院大學学術情報リポジトリ

Date presentation : Unpublished Paper of "Man'yoshu Emonogatari" by Shinobu Orikuchi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Ogawa, Naoyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000055

（資料紹介）

折口信夫「万葉集絵物語」の未掲載稿

小川直之

一、折口信夫の万葉集研究

本稿は昭和十七年一月から四月に雑誌『女学生』四巻一号から四号に連載された「万葉集絵物語」一～四（『折口信夫全集』33所収）に、未掲載と思われる続編の五があるのがわかり、この稿を紹介し、あわせて元原稿と掲載稿の差異も紹介することを目的としている。

その翻刻に先だって、折口の万葉集研究について若干触れておきたい。所謂「折口学」と総称される折口信夫の学問の基点は「万葉集」など上代の文献にあることはすでに指摘されている。たとえば戦後の昭和二十四年四月二十六日に、石田英一郎の司会で行われた柳田國男との対談「日本人の神と霊魂の観念そのほか」（『民族学研究』第十四巻第二号、昭和二十四年十二月、『折口信夫全集』別巻3所収）では、折口の「まれびと」論が取り上げられ、これについて柳田は「私の知つてゐる限りでは、折口君は沖縄に行かれて大きな印象を受けて来られた。しかしマレビトの考へはそれより前だから、やはりご自分の古典研究、古典の直覚から来たものとしかみない」と、その発想と理論の出処が沖縄の民俗事象にあったのではなく、「万葉

集」などの古典にあったことを見抜いている。この対談の「まれびと」論の部分は、柳田が「ではい、機会だから折口君のマレビトといふことについて、一つ研究してみたいと思ひます。私も書かれたものを注意して来てゐるが、私の学問の面にはさうはつきりしたものが出て来ない。意見が違ふから触れずにおいてもいゝが、いい機会だから、あなたがマレビトといふことに到達した道筋みたいなものを、考へてみようぢやありませんか。これはかなり大きな問題だと思ひますから」と、柳田の挑戦的な発言で始まっている。この対談は、「まれびと」論の部分だけではなく、随所に柳田、折口が鋭角的に対立し、両者の考え方の違いが鮮明に表れているが、柳田は折口の「まれびと」論は、自分の研究からは容認できないといいながらも、折口の立論の基点についてはよく理解していたのである。

両者の神観念などについての考え方の違いはさて措いて、ここでの柳田の発言からわかるように、折口は「まれびと」論だけではなく、常世論などをみても、大正十年夏の沖縄採訪以前の「異郷意識の進展」（大正五年十一月、『折口信夫全集』20所収）、「妣が國へ・常世へ」（大正九年五月、『折口信夫全集』2所収）で、すでに海彼の異郷である常世を論じており、柳田がいう古典からの直覚というのは「まれびと」だけではないといえる。

ここで柳田が言っている折口の「古典研究」「古典の直覚」というのは、折口が古代研究の中でしばしば使っている「万葉集」「日本書紀」「祝詞」「風土記」などを指していると思われるが、これらの中でも特に重要なのが「万葉集」であるといえよう。そのことは折口の研究年譜、著作年譜からもうかがえることで、標題・副題に「万葉集」あるいは「万葉」の語を付した著作は、新編の『折口信夫全集』では一三四篇（研究書冊の書評四篇は除いて）もがある。

この一三四篇は、國學院大學在学中である明治四十二年八月の「万葉談義　日並知皇子尊の宮の舎人等の歌」という論考が最初で、巻第二にある舎人等がつくったという二十三首は、詞書を信ずることは出来ないということを、修辞法など作歌の技巧から論じたもので、「形式においては、古代歌謡の影響を受けた謹厳、高古、雄渾、高踏独歩といふ姿が見え、内容の方面では脈々たる人麿式の温い情緒が漲つて居る」ことから、これらの歌は人麿の作であると推測している。

この段階では「万葉びと」という術語や「万葉びと」の生活のありさま、心意などを万葉集歌から読み取っていくという方向は見えないが、この論文から数年後に口述筆記によって稿を

おこした、所謂「口訳万葉集」と呼ばれている大正五年九月、大正六年五月刊の『国文口訳叢書　万葉集』上、中、下では、万葉集歌の捉え方が変わっている。「口訳万葉集」を刊行しながら『アララギ』九巻九号から十二号、十一巻四号に発表した「万葉集私論」一～四（大正五年九月～十二月、大正七年四月、『折口信夫全集』6所収）では、その一・二で万葉集歌の表記を取り上げ、「これからの万葉集研究は、まづ字形の比較研究を基礎としてかゝらねばならぬ」という。そしてその三では、「万葉人ならびに、其以前のわれわれの祖先は、進んだ意味の叙事詩は持つてゐなかつた。そして纔かに、其祖の祖たちの生活の痕を伝へる詩があつたのである」とか「かうした叙事詩が一種の節まはしのまにまに吟ぜられるのを、万葉びと或は其以後の人々も、かたるといふ語で表してゐたのである」と、万葉集歌の時代を生きた人たちの生活や心意を思いやっている。

ただし「万葉びと」という折口の術語は、これ以前の大正四年四月に発表された「髯籠の話」の中で、「五月の邪気を祓うた薬玉は、万葉びとさへ既に、続命縷としての用途の外に」と使っている。これを執筆した大正三年には、折口がいう「古代生活」の分析概念であるこの術語の構想はできていたことになる。折口が、柳田國男のいう民間伝承研究・郷土研究を知り、柳田が主宰した雑誌『郷土研究』に初めて「三郷巷談」（『郷土研究』一巻十号掲載、大正二年十二月）を寄稿するのは大正二年であるので、折口の万葉集研究は大正二年から三年頃には、「万葉びと」という術語形成をともないながら独自の視点を形成しつつあったといえる。[1]

折口はこうして万葉集研究を、これ自体の成立や編纂の意義、歌の訓詁注釈などに加え、「万葉びと」たちの生活のありさまや心意を理解するという古代研究の方途とするのである。柳田國男が『後狩詞記』（明治四十二年刊）、『石神問答』『遠野物語』（明治四十三年刊）などで行った民間伝承研究の方法や意図を、わずか数年で自らの研究に取り込んでいったと考えられよう。そして、こうした研究が進むのは、三十五歳であった大正十一年一月から七月に発表した「万葉びとの生活」（『白鳥』第一号から第四号、『折口信夫全集』1所収）であったといえる。

折口の万葉集研究で、第一に指摘しておきたかったことは、大正初期には「万葉びと」という術語を提示しながら独自の視点と方法の形成が始まり、大正十年頃には万葉集歌にもとづく古代研究が大きく進展し、こうした研究は生涯にわたって続い

ていることである。「万葉集」に関する最後の著作は、昭和二十七年五月三十一日に上代文学会で講演を行った「万葉集と民俗学」を起こしたもので、没後の昭和二十九年七月に同題で『上代文学』第四号に掲載されている。

大正後期の研究進展は、年譜的にいえば、大正八年九月に國學院師範部の専任教員となって生活は経済的に安定し、翌九年七月には、松本での講演を終えた後に十七日に美濃大井（恵那市）に向かい、ここから山間地域の民俗採訪を行いながら長野県の新野などを通って二十六日に静岡市に着くという過酷な旅を行っている。折口にとってはこれが初めての長期の民俗採訪旅行であり、短歌連作「供養塔」「木地屋の家」「遠州奥領家」などとともに「信州採訪手帖」を残している。この採訪の翌年大正十年七月には沖縄に向かい、十六日から八月十四日まで沖縄に滞在して採訪を行っている。この旅も夏の酷暑のなかを、汗もだらけになって柳田が訪ねていない国頭地方まで足を伸ばすなど超人的な旅をしている。しかも沖縄から台風の中を奄美を経て九州に上陸し、その足で壱岐に渡って九月中旬まで民俗採訪を行っている。まだ三十歳半ばで若く体力もあるといいながらも、約二か月にわたる採訪を続けていることからは、いかに民間伝承の調査・実感が折口にとって必要で、重要であったのかがうかがえる。

さらに大正十二年七月の、師である三矢重松が亡くなった翌日の十八日には第二回目の沖縄採訪旅行に出発する。沖縄本島調査の後、宮古島に立ち寄ってから八月二十日には石垣島に渡り、台湾の基隆を経て九月一日に門司に着いている。こうした二度の沖縄・八重山民俗採訪では、王朝祭祀や女人司祭、ニライカナイという常世、「まぶい」という外来魂、マレビトの実像である来訪神習俗などについて実感をもって捉えるのである。そして、大正十四年四月に発表する「古代生活の研究　常世の国」では「琉球諸島の現在の生活—殊に内部—には、万葉人の生活を、その儘見る事も出来る。又、万葉人以前の俤さへ窺はれるものも、決して尠くない。私どもの古代生活の研究に、暗示と言ふより、其儘をむき出しにしてくれる事すら度々あつた」（『改造』第七巻第四号、『折口信夫全集』２所収）と述懐している。折口の沖縄観には、現在の研究水準からいえば問題が内包されているが、折口自身の古代研究は、沖縄・八重山採訪によってより確実なものとなり、飛躍的に進展したことは確かである。

柳田國男が見抜いていた古典からの直覚というのは、いくつか例をあげておくと、先にもあげた大正四年四月の「髯籠の

話」で示された「標山」と「依代」は、「万葉集」巻第三の「ちはやぶる神の社しなかりせば、春日の野辺に粟蒔かましを」が「標山」という習俗の存在を示すという理解から始まっている。「まれびと」については、昭和二年十月に執筆し、昭和四年一月に掲載される「常世及び『まれびと』」（『民族』第四巻第一号、『古代研究』国文学篇の「国文学の発生（第三稿）」）などでしばしば引用される、「万葉集」巻第十四の東歌「にほどりの葛飾早稲をにへすとも、彼の可愛しきを外に立てめやも」「誰ぞ。此家の戸押ふる。にふなみに、我が夫を行りて、斎ふ此戸を」が、この習俗の存在の根拠となっている。「若水の話」（昭和二年八月草稿、『古代研究』民俗学篇一所収）から「水の女」（『民族』第二巻第六号、第三巻第二号、昭和二年九月、三年一月、『古代研究』民俗学篇一所収）へと拡大し、王権論へとつながっていく折口の聖水論は、「口訳万葉集」での解釈をニコライ・ネフスキーの意見によって考え直す、「万葉集」巻第十三の「天橋も長くもがも。高山も高くもがも。月読の持てる復若水いとり来て、君に献りて、をち得しむもの」が、一つの発端となっている。[2] また、折口がいう「むすび」の論理も、「万葉集」巻第二の有馬皇子の「磐代の浜松が枝を引き結び、まさきくあらば、復帰り見む」が重要な論拠になっている。つまり折口は、万葉集歌は伝承心意を内包するものであり、ここからいくつもの古代習俗を発見し、その形成原理を見いだしているのである。それだけではなく、昭和九年十二月に上代国文研究会で講演した「万葉集の民俗学的研究」（『上代国文』第二巻第一号、昭和十年五月、『折口信夫全集』6所収）では、「歌は一つの民俗として発達して来たのですから、民間伝承のうちに文学となつてきました。歌は面白いからではなく、魂を貯蔵出来るものと思はれて伝承されたのです。そのやうな信仰をもつて伝へたからほろびなかつたのです」と、「歌」という言語行為そのものを民俗と位置づけている。

折口信夫の万葉集研究を、折口万葉学というなら、その特色の一つはこうした万葉集歌の捉え方にあるといえよう。しかし、折口万葉学の内容はこれだけではない。折口以後から現在までの万葉集研究者たちは、折口の万葉集研究をどのように位置づけ、どのように評価するのか、その論評が欲しいところだが、中西進は「折口信夫の万葉学」で、昭和十年六月の講演論文「額田女王」（『婦人公論』第二十巻第六号、『折口信夫全集』6所収）を取り上げ、折口はこの論文で額田の歌を、学界を先取りするような中国との比較文化的な観点から文学史上に位置づけ、実証的にその制作年代をおさえるなど、折口は「古

代文学における事実の割り出しに刮目すべき業績をあげていることは、いうまでもない」と指摘し、「総じて折口をすぐれた文学史家であったということができるだろう。そのことは、史実という事実に熱心に着目した国文学者が折口であり、彼が恣意的な主観を押しつけた学者でも、気ままに想念を語った詩人でもなく、学者ということばのカテゴリーがごくふつうに要求する事実の尊重者であった」のであり、折口学というのは「事実の学」であると評している。そしてさらに、「折口が問題とした事実」というのは、本文の校訂や作家の事蹟など「可視的な事実」ではなく、「目に見えるもののもう一つ奥にある、われわれの心情の仕組みとか表現の約束とかといった事実がそれであり、しばしば不可視のゆえに情緒や想念のように思われがちだけれども、厳然たる事実として歴史を貫いて存在するもので」、「折口学を事実の学だといったのは、そうした謂であって、可視的な文学現象を解析することを科学と考えるレベルとは、所詮無縁の学問であった」と総括している。[3]

こうした折口万葉学の検証も行いながら、「万葉集」を基点に新たな日本学を構築しようとしているのが辰巳正明で、著書『折口信夫　東アジア文化と日本学の成立』の、たとえば「天皇の解体学」では「万葉集」にみられる「ヒツギ」の思想などを検討しながら、「折口の天皇霊論は正当な主張であったと思われる。天皇霊は、日の皇子として地上に下された者が即位の儀礼を経て継承する」という。「惟神の真意義と民族的モラルセンス」では、折口の「神ながら」の四類型を再検討し、また「日の皇子と高天の原神学」では、折口がいう神々の神学体系の形成を藤原宮頃と推測する根拠を万葉集歌から明らかにするなど、折口万葉学を積極的に検証しなおしている。[4]

先に述べたように折口には、「万葉集」あるいは「万葉」という語を題目に含めるものだけでも一三〇篇を超える著作がある。題目にかかわらず「万葉集」や万葉集歌、万葉歌人を扱った著作を加えるならその数はさらに多く、折口説の祖述や自説への援用ではなく、ここで取り上げた中西進や辰巳正明が提示しているような折口の事実認識や論理の妥当性を検証することが必要になっている。

二、『萬葉集畫撰』と「万葉集絵物語」

折口万葉学の批判と継承は今後に期すことにして、以上を踏まえながら昭和十七年に発表した「万葉集絵物語」の未掲載稿の紹介に移りたい。

雑誌『女学生』第四巻第一号から四号に発表した「万葉集絵物語」は、画家の大亦観風が描いた連作「万葉集画撰」をもとにして、その絵様も含めながら執筆されたものである。大亦観風の「万葉集画撰」というのは、「万葉集」の歌を題材にし、その内容を情景として描いた日本画で、これを一冊にまとめた『萬葉集畫撰』に付されている観風自身による昭和十八年二月十一日付けの「跋語」によれば、昭和十五年十一月の皇紀二千六百年を奉頌することを目的に、昭和十四年から「万葉の心を描き得る」万葉集歌を一三一首選び、これを七十一画に描いたものであるという。昭和十五年秋には完成し、「万葉集画撰展覧会」が個人展として東京で開催され、翌十六年六月には大阪でも展覧会が行われた後、奈良の橿原神宮国史館に寄贈された。その後、これらの絵は観風の日本画の師である小室翠雲の勧めで一冊の書冊にまとめて出版することが決まり、美術製版を行って昭和十八年十一月に『萬葉集畫撰』として大阪の錦城出版社から刊行されることになったとある。[5]

観風は、「万葉集」の歌を題材に、歌の現場を訪ね歩きながら歌の情景を描き、これを「万葉集画撰展覧会」として個展をひらき、さらに『萬葉集畫撰』と題した画集を出版しているのであるが、この展覧会に関わる出版物としては『大亦観風個展目録』、『万葉集画撰展画集』もあったようで、折口はこの目録と画撰展画集に「順礼の心」[6]の祝辞を寄せている。これらには日本画の師である小室翠雲、武田祐吉、吉川英治も祝辞を書いているが、折口の「順礼の心」は、この絵を描くにあたって観風は万葉集歌の古跡の地を巡っていることを「一つ一つが、体験から出た構成であつて、単なる架空の作風ではない」と、観風がどのようにして万葉集歌を捉えて絵に描いていったのかを取り上げ、その行いを讃えている。折口が観風の画業をこのようにいうのは、折口自身が昭和六年に慶應義塾大学の学生たちと万葉旅行を始めて回を重ね、昭和十一年からは國學院大學国文学会でも「万葉遠足」を始めていたことと無関係ではなかろう。[7]折口にとっても歌の実地踏査は、万葉集歌を理解する方法の一つだったからである。

画家の大亦観風は、明治二十七年九月二十七日に現在の和歌山市広瀬舟場丁に生まれ、本名は大亦新治郎。日本美術院で洋画を学び、後には日本画も学んでいるが、一方では古泉千樫に短歌を師事し、歌誌『青垣』の創刊同人となっている。戦後昭和二十一年には抒情短歌社をおこして歌誌『抒情短歌』を創刊主宰するが、昭和二十二年十月二十二日に五十三歳で病没している。

折口は、観風が歌人としては古泉千樫の門下にあったので、旧知の仲であるとともに、観風の「万葉集画撰」には親しみをもっていたようで、展覧会に心を寄せ、祝辞も書く。そして、昭和十八年の画集『萬葉集畫撰』出版にあたっては、武田祐吉、澤瀉久孝、齋藤茂吉、佐佐木信綱とともに絵のもとになった万葉集歌の解説を書き、これに加えて観風の絵をもとに、ここで紹介する「万葉集絵物語」を『萬葉集畫撰』出版に先立って、昭和十七年に雑誌『女学生』に連載するのである。経過からみても折口は、観風の万葉集歌の絵に特別な思い入れがあったのがうかがえる。

『萬葉集畫撰』の七十一画のうち、折口が歌の解説を書いているのは次の十九画である。これらの解説は折口信夫の名で書いている。

第二十三図　「柘枝の仙女の歌」（三八五・三八六番歌）
第二十四図　「龍田山にて悲傷の御歌（上宮聖徳皇子）」（四一五番歌）
第二十五図　「近江天皇を偲び奉れる歌（額田ノ女王）」（四八八番歌）
第二十八図　「日本琴の歌（大伴ノ旅人）」（八一〇番歌）
第二十九図　「太宰府梅花宴の歌」
第三十図　「領巾麾嶺の歌（大伴ノ旅人卿）」
第四十五図　「葛飾ノ真間ノ手児名を詠める歌（高橋蟲麻呂歌集）」（一八〇七番歌）
第四十六図　「菟原処女の墓を見し時の歌（高橋蟲麻呂歌集）」（一八〇九番歌）
第四十七図　「七夕の歌（柿本ノ人麿歌集）」（二〇一三番歌）
第四十九図　「正に心緒を述ぶる歌（作者不詳）」（二八七五番歌）
第五十一図　「東歌の相聞歌」（三三六一番歌）
第五十二図　「遣新羅使之船逆風に遭へる時の歌（雪ノ宅麿）」（三六四四番歌）
第五十三図　「中臣ノ宅守狭野ノ茅上ノ娘子との臨別の歌」（三七二三番歌）
第五十四図　「竹取ノ翁の歌」（三七九一番歌）
第六十一図　「放逸鷹を偲ぶ歌（大伴ノ家持）」（四〇一一番歌）
第六十二図　「独り霍公鳥を聴く歌（大伴ノ家持）」（四〇八九番歌）
第六十三図　「陸奥ノ国の黄金を賀し奉れる歌「一」（大伴ノ家持）」（四〇九四番歌）

第六十四図「　同　（海ゆかば）
「二」（大伴ノ家持）」
第六十五図「　同　（山ゆかば）
「三」（大伴ノ家持）」

解説文（『折口信夫全集』34所収）は長短さまざまだが、第五十四図の竹取の翁、第六十一図の放逸鷹を偲ぶ歌には長い解説を寄せている。解説は、基本的には各図とも折口らによるものと観風自身のものがあるが、中では齋藤茂吉が合計で二十七画の解説ともっとも多い。ちなみに武田祐吉は十の万葉画の解説を書いている。[8]

折口ら五人がどのように解説の分担を決めたのか、興味深いものがあるが、十九画の解説は齋藤茂吉に次いでおり、このことからも観風の万葉集歌の絵に惹かれているのがわかる。折口は先の「順礼の心」では、「絵事を解せぬ私が」といっているが、小説『死者の書』の解題ともいえる昭和十九年七月の「山越しの阿弥陀像の画因」[9]では、冷泉為泰筆の阿弥陀来迎図からはじめて、いくつもの来迎図を引き合いに出しながら、この絵に底流する日本人の日想観という心意に画因を求めている。情景描写の背後にある思いに鋭く切り込んでいるのであり、折口は「絵事は解せぬ私」だったとは思えない。[10]

大亦観風の『萬葉集畫撰』は昭和十八年十一月二十日付けの発行なので、昭和十七年一月から四月の『女学生』第四巻第一号から四号に連載した「万葉集絵物語」は、昭和十五年の展覧会と『万葉集画撰展画集』に基づいて執筆されたものと思われる。その原稿が、平成二十六年に古書店からの情報によって存在することがわかり、五月に折口博士記念古代研究所に収蔵することができた。原稿は、折口がよく使っていた伊東屋製の、表面のみコート紙のように仕上げた紙（縦二一二㎜・横一九三㎜）に二十字十行の枡目を印刷した原稿用紙に自筆されたもので、全三十六枚である。黒一色の万年筆で書かれ、原稿には必要に応じてルビが振られ、訂正や加筆も見られる。しかし、編集時に付される文字の大きさや行どりなどの指示は見られず、この稿がそのまま雑誌編集部に送られ、印刷所に入れられたものかどうかは不明であるが、『折口信夫全集』33に収録された「万葉集絵物語」と比較すると、表現に若干の変動がある程度で、内容は変わっていないので、この稿が印刷原稿となった可能性が高い。であるならば、表現の変更は校正時に行われたことになる。

「万葉集絵物語」は連載稿であるので、回ごとに右肩をホチキスで綴じていて、左上の欄外に記された原稿番号は、連載回

ごとに自筆で記入されている。この原稿の最後に、『折口信夫全集』33には収録されていない、連載一回分の原稿が含まれていた。『折口信夫全集』未収録であることが、雑誌『女学生』に掲載されなかったことを保証するものではないが、旧版、新版とも『折口信夫全集』には未収録なので、『女学生』にも未掲載だった可能性が高い。雑誌『女学生』は、今のところこれを所蔵する機関が見つからず、現物を確認できていない。(11)

自筆原稿の紹介に入る前に、全集収録の「万葉集絵物語」からいくつかのことを確認しておくと、初めの序文から、これは「万葉集」の専門家ではなく、読み始めあるいはこれに関する知識のない人たちを対象にしたこと、知人の大亦観風が描いた「万葉集画撰」から「十二の画面だけ拝借して、私の説明の上に、も一つ仮名をふる様な事に、利用させて戴きます」とあり、「万葉集」を観風の「万葉集画撰」も利用しながら説明するものであることがわかる。公刊された四回の連載は、一回目が「第一　天の香具山」、二回目が「第二　季節の印象」、三回目が「第三　老いを尚ぶ」、四回目が「第四　田舎わたらひ」と題名が付けられ、第一では観風の絵に触れていないが、稿の内容からは観風の「第二図　舒明天皇香具山望国の御製（舒明天皇）」、第二では「観風画伯の絵では、松に藤の花が垂れて居り、」とあって、「第八図　天ノ香具山の御製（持統天皇）」を使っている。第三は竹取の翁のことで、「大亦観風画伯の絵には、よくこの竹取の「翁舞」の姿が描かれて居ます」といい、「第五十四図　竹取ノ翁の歌」、第四は観風の絵には触れていないが、「万葉集画撰」では「第五十図　泉河の問答歌（作者未詳）」が対応している。なお、『萬葉集畫撰』での第二図は佐佐木信綱、第八図は齋藤茂吉、第五十図は澤瀉久孝が解説を書いている。第五十四図は折口の解説であるが、「万葉集絵物語」の稿が『萬葉集畫撰』の解説に連続しているわけではない。

第一から第四まで、このように観風の「万葉集画撰」が一画ずつ該当することからは、最初に言っている「十二の画面だけ拝借して」というのは、当初、連載は一年間、十二回を予定していたことが考えられる。しかし、第三回では観風の絵では一気に第五十四図へと飛ぶ。掲載されなかった第五回の稿では後述のように、防人歌を取り上げ、観風の絵では「第六十九図相模の国の防人の歌（丈部ノ造人麿）」が対応するので、二回の連載後に、連載が短縮された可能性もあるが、詳細は不明である。

また、折口の自筆原稿では、第一回目の連載題名は「萬葉集繪詞」で、筆者名は「釋迢空」となっていて、題名の「詞」の

横に鉛筆書きで「物語」、筆者名の右には同じく鉛筆書きで「折口信夫」とある。連載題目、筆者名に迷いがあったのがうかがえよう。また、第四回目の題名は、原稿では「第四　田舎わたらひの生活」であった。

三、未掲載の「万葉集絵物語」稿

雑誌『女学生』には掲載されず、『折口信夫全集』にも未収録の「万葉集絵物語」連載五回目は次のような稿である。

萬葉集繪物語　　折口　信夫

今度は少しばかり、美しい『時の歌』の解説をして見ませう。時代に適つて、皆さんの讃頌を催すはずの歌といふことです。此繪様はどうや（ら）「萬葉集畫撰」で見ると、社殿の様子から松が群立つて居たり、波うち際の近いところなどで見ると、海に向つた國の大きな社の廣前らしく思はれます。武器で身をかためた古代の軍人の、跪いてゐるところを見れば、其うしろに波の寄せてゐる様子なども、どうも此から、遠い征旅の道に上らうとする人々だ、と言ふ感じが著しく出て居ます。観風畫伯の計画では、筑紫の國々へ向ふ防人をうつされたものらしいのです。大体その位の身分らしく描かれてゐます。

防人と言ふ語は、崎守りと言ふことか、まう少し深い意味において、國の崎々を守る人を言ふのか、防禦者の中で、最先頭にあるものと言ふ義ですか、くはしいことはまだ訣らぬのです。ともかく九州の中で、主に大陸方面に向けての守りに当る人々らしく考へられます。中には、筑紫の南、國の中の蛮人を防ぐ為の備へと思はれるやうな配置をした處もありました。東の國の人々でつくつた軍團で、妻子のある相当な年頃の男も多かつたのですが、中にはまだ結婚もしない極めて若い青年たちも、召されて行きました。

さうして任期が満ちると、元の國々に還るわけなのですが、何しろ当時の旅です。行きの困難な旅路を顧みて、とうとう生れ故郷に帰ることの出来なかつた人々もありました。此人々の子孫が、そこで栄えたのもあります。九州肥前辺の松浦黨といふ一黨の武人が其だらうと思はれます。心の純で、勢激しく、ものに深く感じ易い人々、自分たちの生れた地方から遠く出たことのなかつた人々が、はじ

めて遠い旅をするのです。

故郷の山川、村やわが家、そこに住む父母、其から妻や愛する人々、かう言ふ離れ難いものに別れて行く心が、其よりもつと大きな感激によつて光り輝いて、今日見ても其美しさ譬へるものもない沢山な歌になつたのです。「今日見て」と言ひましたが、唯今の我々心なればこそ、此篇の千年以前のまだ開け方の足らなかつた東の國々の選ばれた浄い人々の心がそのままに理會出来るのです。萬葉集巻二十の中に、凡、百首ほど記録してあります。此は、度々召されて行つた防人の中、奈良朝の天平勝寶七年二月に召された人々の数多い作物の中から選択したものなのです。その当時、今で言へば、少輔陸軍省の高い位置に居て、軍政を見た—共部少輔大伴ノ家持が、其國々の防人を引率して来た地方官の人々の手で献られたものを書き留めて書いたものらしいのです。

防人の人々の宮廷の御事に召された感激から迸り出た忠誠を誓ふ歌で、一括して献上したものと思はれるのです。

防人の歌

あられふり　鹿島の神を祷りつつ、皇軍に　我は来にしを

右、常陸國防人、那賀郡上丁大舎人部千丈

天地の神をいのりて　霊矢貫き、筑紫の島を　さして行く。我は

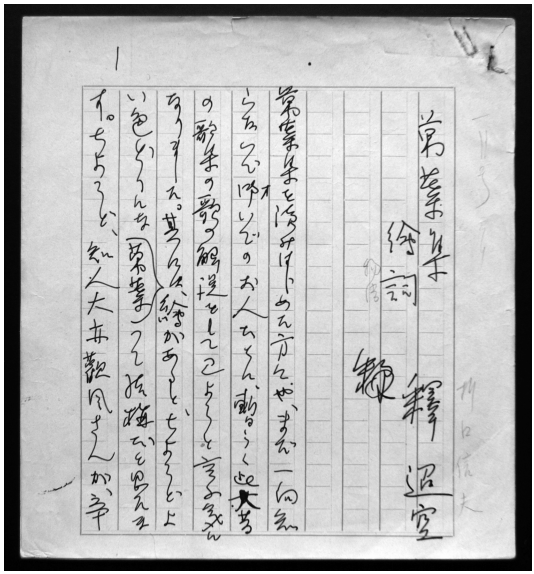
右、下野國防人火長、大田部荒耳。

大亦観風畫

未掲載稿は右の通りで、文中の最初の方に「「萬葉集畫撰」で見ると」とあり、その説明からいえば、この稿は前述のように「第六十九図　相模の国の防人の歌（丈部ノ造人麿）」を用いていることは確かである。『萬葉集畫撰』では、四三二八番歌の「大君の命かしこみ磯に触り海原わたる父母を置きて」に基づく絵とされ、齋藤茂吉が解説をつけているが、折口は「万葉集絵物語」では別の防人歌をあげている。

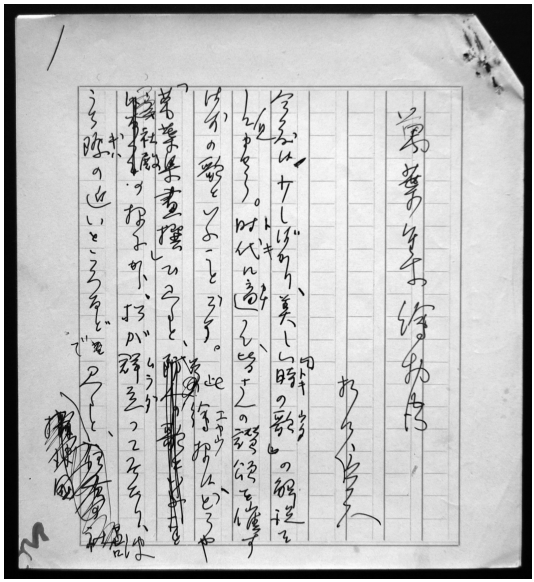
折口の「万葉集絵物語」と大亦観風の画集『萬葉集畫撰』は、ともに日中戦争から太平洋戦争へと移り、戦況が激しいときものである。『萬葉集畫撰』では、佐佐木信綱の「序」には「今や大東亜聖戦二年に入り、一億国民の意気ますます旺なる秋、いよいよ高唱せらるべき万葉精神を、絵によりて国民の胸奥にうゑつけるといふことは、弥が上にも喜ばしい」という、

戦時下の戦意を発揚するような文章が織り込まれている。これに対して折口の「万葉集絵物語」では、一回から四回までの解説は、研究水準を示しながらも、[12] 序文にいうこの連載の目的通り、語りかけるようなやさしい言葉で綴られ、戦時下にあるような文面は見られない。第一回目の稿にあるように、筆者名を「釋迢空」から「折口信夫」と変えたのは、戦時下の歌人ではない、学者としての折口信夫の表明であると考えるのは穿ちすぎであろうか。



未掲載の「万葉集絵物語」原稿

しかし、未掲載の第五回では防人歌を取り上げ、「今度は少しばかり、美しい『時の歌』の解説をして見ませう。時代に適つて、皆さんの讃頌を催すはずの歌」とか、「今日見て」と言ひましたが、唯今の我々心なればこそ、此篇の千年以前のまだ



「万葉集絵物語」連載第一回の原稿

開け方の足らなかつた東の國々の選ばれた浄い人々の心がそのままに理會出来るのです」には、戦地へと赴くことへの美化がうかがえよう。第五回の稿での防人の説明は、短文ながら適確で研究者としての水準が示されているが、この稿には戦時下の釋迢空が姿をあらわしているように思える。

未掲載の連載五については以上の通りだが、連載の第一、第二、第三、第四にも元原稿と異なる点があるので紹介しておく。

連載第一では、掲載稿にある末尾の「大和には群山あれど、とりよろふ天の香具山、登り立ち国見をすれば、国原は煙立ち立つ。海原は鴎立ち立つ。可怜国ぞ。蜻蛉洲大和の国は」の「万葉集」二番歌は元原稿には記載がない。

連載第二では、掲載稿の末尾「この御製の様な歌を、叙景詩といふのです」から、最後の「記念すべき御製なのです。」は、元原稿には記載がない。これらは、紙面に余白があって、後で追加した稿である。

連載第三では、元原稿末尾に三七九一番歌の左の一節があるが、掲載稿にはない。

……春さりて野(ヌ)べを廻(メグ)れば、
おもしろみ　我を思へか、
さ野(ヌ)つ鳥来鳴き翔(カケ)らふ。
秋さりて、山辺を行けば、
懐しと　我を思へか、
天雲(アマグモ)も行きたなびき、
還りたち　道を来れば、
うちひさす　宮女(ミヤヅミナ)
さすたけの　舎人壮夫(トネリヲトコ)も
恋(シヌブ)られ　顧(カヘリ)ひ見つ、
誰(タ)が子ぞとや　思(オモ)ほえてあらむ・・・・

連載第四では、元原稿には末尾の反歌に続けて次の稿がある。

ある本の反歌
まそ鏡持たれど、我はしるしなし。君が、陸地(カチ)より泥(ナヅ)み行く。見れば
馬かへば、妹陸地(イモカチ)ならむ。よしゑやし。石は踏むとも、我(ワ)は二人行かむ

連載の第三、第四は、元原稿にはここで取り上げた万葉集歌が書かれているが、掲載時には削られている。掲載紙面からはみ出ていたための調整だろうか。なお、元原稿と掲載稿とには、まだ表現などに若干の違いがあるが、大きく異なるのは右の通りである。

注

（1）「万葉びと」という表現は、柳田國男も「川は萬葉人の眞率なる吟詠の中にも、既に十分に讃美せられ、」（「川」昭和十一年八月、後に『豆の葉と太陽』に収録。『定本柳田國男集』第二巻所収）として使っている。

（2）折口信夫とニコライ・ネフスキーの交流については、保坂達雄『神話の生成と折口学の射程』（岩田書院、平成二十六年十一月）の「聖水信仰の発見―ネフスキーの提起と折口信夫による展開―」に詳しい。

（3）中西進「折口信夫の万葉学」（『短歌』第三十四巻第十一号〈特集・釈迢空―生誕百年記念―〉昭和六十二年十一月、角川書店）。折口の「万葉集」研究については、尾崎暢殃「折口先生と萬葉集」（『國學院雑誌』第五十五巻第一号〈折口信夫博士追悼号〉、昭和二十九年五月）、柳井己酉朔「折口先生の萬葉學」（『日本文学論究』十八巻〈折口信夫先生七年祭記念特集〉、國學院大學国語国文学会、昭和三十六年三月）など、没後早くから取り上げられているが、折口の研究や学説を紹介するものが大半で、折口説の妥当性について論じたものは少ない。

（4）辰巳正明『折口信夫　東アジア文化と日本学の成立』（平成十九年五月、笠間書院）では、ここにあげた以外にも、折口がいう「日本学」の意味など、折口の「万葉集」研究以外についても取り上げられている。

（5）大亦観風『萬葉集畫撰』は、平成十二年七月に『萬葉集畫撰（再編版）』として大亦博彦によって奈良新聞社から再刊されている。昭和十八年の『萬葉集畫撰』はB4版三九七頁のものだったが、再編版は、これをもとに『大亦観風個展目録』『万葉集画撰展画集』に寄せられた小室翠雲、武田祐吉、折口信夫、吉川英治の祝辞を収録し、絵をすべてカラー版にし、A4版にして発行されたものである。

（6）『折口信夫全集』34の「万葉集歌解説」の解題では、「順礼の心」が掲載された『大亦観風個展目録』は昭和十五年一月、『万葉集画撰展画集』（河出書房）は同年二月刊行となっているが、これらの刊行年は観風の「跋語」とは合致しない。ただし『大亦観風個展目録』『万葉集画撰展画集』は未見なので、後日を期したい。

（7）折口の慶應義塾大学学生との万葉旅行については、保坂達雄『神話の生成と折口学の射程』（岩田書院、平成二十六年十一月）所収の「折口信夫の飛鳥万葉旅行」に紹介がある。

（8）『萬葉集畫選』では、佐佐木信綱は八画、澤瀉久孝は八画の解説を執筆している。

（9）「山越しの阿弥陀如来の画因」は『八雲』第三輯所収。のちに『死者の書』（昭和二十二年七月、角川書店）にも収録される。『折口信夫全集』32所収。

（10）折口の原稿類には、多くの絵が含まれている。こうした原稿やノート、手帖などに描いた絵は、必ずしもいたずら書きとはいえない。また、折口は大正十年の沖縄採訪からカメラを持って写真撮影を行っており、こうした絵や写真へのこだわりは作歌の営みと結びつく感性といえる（小川直之「折口信夫の生涯と資料」〈小川直之編『折口信夫・釋迢空―その人と学問―』平成十七年四月、おうふう〉参照）。

（11）雑誌『女学生』は、大日本聯合婦人会編、女学生社発行、昭和十四年

創刊で、昭和二十二年の第八巻三号が終刊。詩人の白鳥省吾が編集に携わった。

(12) たとえば二回目の「季節の印象」では、二十八番歌である「春過ぎて夏来到るらし。白栲の衣乾したり。天の香具山」を、これによって「日本叙景詩」が大きな目を開いたと指摘していることなど。

附記

折口信夫直筆の「万葉集絵物語」の翻刻にあたっては、文学部日本文学科の佐野光一教授にご教示頂いた。末筆ながら御礼申し上げます。

また、本稿は平成二十六年九月二日に羽咋市折口文学公開講座で行った講演「未掲載の『万葉集絵物語』原稿—折口信夫の万葉集研究—」をもとにしたものです。